

第69回（令和4年7月）文章入力スピード認定試験（日本語）問題

子供のころから茶道を習っていると話す、特に年配の方々には感心されることが多い
40
のですが、わたしの場合は、けいこのときに先生が出してくれる和菓子を楽しみにして、
80
20年以上通っているというのが本音です。それらは季節ごとの風情をまとい、時には愛
120
らしく、また芸術品のようでもあります。今から千年以上も前から、日本人の目と舌を楽
160
しませてきたといわれています。ところが、和菓子という呼び名が使われるようになるの
200
は意外にも新しく、明治時代になってからだそうです。海外からケーキやクッキーなどが
240
もたらされたために、それらと区別するために生まれた言葉だそうです。
274

さて、お茶の先生のお宅へ通い始めたころのわたしは、小学生にもなっていなかったの
314
で、まんじゅうやようかんの種類もよく分かりませんでしたし、ましてやそれぞれに名が
354
あることなど全く知りませんでした。しかもそれらは俳句や和歌、全国の名所や四季折々
394
の花鳥風月などをテーマに命名されているのですから、小学生以下の子供にとっては、と
434
ても理解できるものではありません。そこで先生はわたしにだけ、その日に使う菓子を解
474
説するところから、けいこをスタートさせてくれました。おかげで俳句や和歌に関するあ
514
れこれや、訪れたこともない名所や旧跡の場所、季節ごとに咲く花の名前など、たくさん
554
の知識を得ることができました。特に印象に残っているのは、中国から伝来した当初のよ
594
うかんが、ヒツジの肉の入ったスープだったという話です。それが、どのような経緯をた
634
どって、滑らかな口当たりの甘味品になったのか想像もつきませんでした。先生によれば
674
それは精進料理として、肉を使わずに小豆や小麦の粉などの植物性の材料で代用したため
714
だといいます。それらを蒸して丸めたものを煮込むことで、中国から伝わったスープに近
754
づけようとしたのです。後には、その中身だけを食べるようになるのですが、味付けを工
794
夫することで、茶に添えるおやつとなったのが、わたしたちのよく知る蒸しようかんの始
834
まりだということでした。
847

そして、菓子作りに欠かせないものといえば砂糖でしょう。日本に伝わったのは奈良時
887
代とされています。当時は貴重な薬として扱われ、南蛮貿易が本格化して流通量が増える
927
までは、庶民たちの手に届かないものだったといわれています。国内で生産が始まるのは
967
江戸時代の中期になってからなので、甘いものを人々が気軽に楽しめるようになるまで
1,007
は、まだまだ年月を要します。ところでこの調味料が優れているのは、単純に素材に甘い
1,047
味を付けておいしくするという点だけではありません。例えば、硬い素材を煮る際に加
1,087
えると軟らかくなり、糖が水分を保持するため、時間を置いても乾燥しにくくなります。
1,127
さらに水に溶いて表面に塗れば、つやを出す効果もあります。砂糖が広く普及したこと
1,167
により、日本の菓子類が飛躍的においしく、美しくなったのは事実でしょう。そこに京都や江
1,207
戸の職人たちのセンスや技が加わり、さらに発展していくことになるのです。
1,243

わたしが物心ついたころから成人して社会に出るまで、わが家は祖母が中心となって洋
1,283
品店を営んでいました。忙しいときに手伝うと小遣いがもらえたので、幼いなりに接客を
1,323
した記憶があります。そんな環境の中で、朝から晩まで働きづめだった祖母ですが、彼女
1,363
が何より大切にしていたのが、黒いボディーの足踏みマシンでした。普段は客が購入した
1,403

パンツ類の裾上げや子供服のサイズ直しに活用していましたが、たまに時間が空いた際は	1, 443
人形の洋服や着物を縫ってくれました。それは小さいのによくできていて、特に自分の夏	1, 483
服の端切れなどで作ったワンピースを着せた人形には、より一層親近感が湧き、妹のよう	1, 523
に感じたものです。あのころのわたしにとって、祖母のミシンはまるでどんな服も作るこ	1, 563
とのできる魔法の機械でした。	1, 578
しかし、自分だけでは絶対に触れてはいけないと厳しく言われていました。その言い付	1, 618
けを破ったのは中学2年のときです。家庭科の授業で電動ミシンを使い、縫った雑巾が思	1, 658
いの外うまくできたことで調子に乗り、同じものを祖母に作って喜ばせたいと考えたので	1, 698
す。近くに誰もいないのを確かめ、折り重ねたタオルに針を落としたのですが、上下の糸	1, 738
の調子が合わずに表面が引きつれて、悲惨な状態になってしまいました。学校ではあらか	1, 778
じめ先生が、上下の糸の調整をしたうえで使わせてくれていたことを随分後になってから	1, 818
知りました。絶対に触れるなど言っていたのは、慣れないうちは、布の厚みや硬さによっ	1, 858
て細かな調整をするのが難しいからでした。現在では、布に合わせて自動的に上下の糸を	1, 898
調整してくれる、便利な機能を搭載しているものが多いようですが、祖母のミシンには当	1, 938
然そのような機能はありません。それに加えて足踏みミシンには癖があり、それを把握し	1, 978
たうえで、操作に慣れていなければうまく使いこなせないのだそうです。	2, 012
さて、祖母がなぜ、おそらく当時は高価だったと思われるミシンを入手しようと考えた	2, 052
のか、そして専門的な学校へ通わずに、なぜ洋服などを縫えるようになったのかを尋ねた	2, 092
ことがあります。昭和20年から30年ごろに若い時代を過ごした彼女は、戦争で不足し	2, 132
ていた家族の衣類を用意するために、焼け残った着物や帯を活用して洋服に仕立て直そう	2, 172
と考えたそうです。かつての日本人は、日常的に和服で過ごしていましたが、戦後の厳し	2, 212
い生活の中では、できるだけ活動的で着替えも簡単な衣類が求められていました。この時	2, 252
期には、女性たちの力によって、全国各地でひっそりと服装の変革が進んでいったよう	2, 292
です。しかし、あらゆる物資が不足していたこの時代には、既製品は当然、布地さえ入手困	2, 332
難だったので、今あるものでやりくりする必要がありました。また、洋裁の知識や技術を	2, 372
身に付けている者も少なく、そうしたことを得意としている人の元には、仕立ての依頼が	2, 412
殺到したそうです。	2, 422
彼女も近所に住む親戚の家に通って基礎を教わり、最初は手縫いで作業を進めていま	2, 462
した。ところが、家族全員の分となると量が多くて大変だったため、部屋の隅の方にあった	2, 502
ミシンを借りることにしました。その仕上がりのあまりの素早さにとても感動したそうで	2, 542
す。見慣れた布地が、手縫いよりも格段に速いスピードで新しい洋服に生まれ変わったの	2, 582
ですから、それは彼女自身にとっても魔法の機械だったわけです。以来、貯金をして購入	2, 622
することを真剣に考えたようです。家業に洋品店を選んだのも、そういった経験がきっか	2, 662
けだったのかもしれない。	2, 675